HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光デザインというお仕事！！
Author(s)	山村，高淑
Relation	学びのヒント（京都嵯峨芸術大学ホームページ）
Issue Date	2003-10-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38528
Type	article
File Information	20031027_kankou_design.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「観光デザインというお仕事！！」

山村高淑

★「観光」はミサイルより強いか？

外国を旅することとはどういうことでしょうか？それは、あなた（特定の人間）が自らの文化的バックグラウンドを保持しつつ（つまり日本文化を背負って）、地球文明に参画することです。「観光」とは特定の文化圏に属する人間（集団）が、他の文化圏と出会うために人間が作り上げた、ひとつの文化的なシステムです。つまり「旅」そのものが「文化」なのです。ですから結果として、「観光」とは、文化間の衝突あるいは対話が最も生じやすい場になるのです。外国でカルチャーショックを受けるのはその良い例です。

さて、経済発展著しいアジア諸国を中心に、海外旅行をする観光客数（国際観光客数）は急速に増えています。世界観光機関（WTO）は、2020 年には全世界の国際観光客数は 16 億人になると予想しています。こうした状況下、今後、異文化間の接触はますます不可避となることは明らかです。各国・地域にとって、こうした交流を多国間の枠組みの中で適切に誘導し、如何に国家間の安全保障の基盤を構築していくかということが大きな課題となってきているのは、こうした背景があるためなのです。

実際に近年では、EU や ASEAN 地域内、中国と ASEAN 地域間等に見られるように、超国家的な枠組みが構築されていく中で、観光開発が、多国間の協調による広域的経済開発プログラムとして位置づけられることが多くなっています。そして、そうしたプログラムの目指すところが、経済発展のみならず、文化的安全保障の提供にもあることは言うまでもありません。つまり、今後、地球規模での大交流時代を迎えるにあたり、それぞれの国家・地域は、外交、軍事に次ぐ「第三の国家安全保障の手段」として「観光活動」を政策的に機能させる必要性に迫られているのです。冷戦終結後、21 世紀に突入し、明らかに世界の潮流はそういった見方を必要としています。

例えば具体的に、多国間で相互の文化遺産の価値を評価し、観光活動を通してそうした価値を人々に広めていくためにはどうすればよいか考えてみましょう。まず、それまでは単なる地域のアイデンティティの拠り所としてしか位置づけられてこなかった文化遺産について、多国間でその価値を評価・保証し、お互いの「共有財産」として保全管理する枠組みの構築が必要となります。そうしたうえで、それら「共有財産」を通じた国際観光活動において、「共有財産」の重要性を来訪者と地域社会の両者に理解させるのです。世界中に散らばる文化遺産を人類共有の財産として位置づけ、観光活動を通して公開していこうという、「世界遺産」の考え方の重要性は、実はこの点にあるのです。「世界遺産」の登録作業を進めている UNESCO 自身が、教育・文化・芸術活動を通して世界平和を実現していくことを第一目標として標榜している組織であることからも、そのことがはっきりと見て取れます。

★「観光デザイン」という仕事で世界を変える？

「観光」に関するこれまでの研究は、国際的に見ても、文化人類学・社会学といった観点から、純粋な学問的好奇心の対象として論じられるか、ホテルの管理や経営といった観点からビジネスとして論じられるかのどちらかでした。ですから、先に述べたような、複数の国の間で「観光」というものをどう平和のために利用していくのか、といった視点からの研究はほとんどなされていません。例えば「観光」をビジネスの面から教える大学は内外に数多くありますが、これを「文化的安全保障」の面から論じている教育機関は、少なくとも日本には存在しません。このような現状、そして国際観光という社会現象の持つ複雑さを踏まえれば、既存の学問分野を超えた新たな学際的且つ総合的な教育・研究体制の構築が必要であることは言うまでもありません。こうした時期に「観光デザイン」学科が成立したのは、まさに時宜を得たものと言えるのです。

「観光デザイン学科」では、既存の分野にとらわれず、社会の動きを敏感に捉えて、「芸術や文化」の守り方・伝え方・創り方・残し方・見方・見せ方を学んでいます。ちょっとキザな言い方をすれば、「芸術や文化」を通して「ひと」と「ひと」との「心」のつながりを総合的に「デザイン」しているのです。そしてこうした「心」と「心」が出会う場こそ「観光の場」なのです。ですから、例えば皆さんがギャラリーの展示空間をデザインしたり、イベントのチラシをデザインしたりするのも、人の「心」と「心」が出会う「観光の場」をデザインしていることになる?すなわち「観光デザイン」の実践なのです。

それから。こうしたテーマは既存の学問体系では実践不可能です。なぜなら常識にとらわれない、全く新しい試みが必要だからです。そしてそのためには、やはり若い世代の皆さんが、21 世紀に相応しい、全く新たな「デザイン」概念を構築していくしかないのです。50 年後の世界を変えることができるのは、その時生きている、今の若い皆さんしかいないのです。

★芸術は原点に帰るべし！！観光も原点に帰るべし！！

「文化的安全保障の手段」としての「観光活動」を考えるとき、「芸術」というものの存在が極めて大きな意味を持ってきます。「芸術」とは言語や文化的背景の壁を越えて、つまり国境をたやすく越えて、人の心に直接感動を訴えかけることができる媒体であるからです。ピカソの「ゲルニカ」を引き合いに出すまでもなく、政治家や研究者がいくら言葉で訴えても伝わらない内容を、一枚の画がいともたやすく伝えてしまう。画だけではありません。シベリウスの交響詩「フィンランディア」が帝政ロシアの支配下にあった祖国の独立を願うフィンランド国民の心を支え、ショパンの愛国的なピアノ曲がナチスドイツ圧政下のポーランド国民の心を支えたのは有名な話です。

先にも少し触れましたが、観光活動とは「単なる人の移動に伴う社会現象」というだけではなく、「芸術・文化の交流」という重要な側面を持っていることを、我々は今一度真剣に考えてみる必要があります。京都の持つ芸術・文化の素晴らしさを、うまく来訪者に表

現することが出来たら?こうした芸術･文化の交流を世界規模に広げることができれば･･･芸術には、人々を感動させ、そして国境を越えて民族・文化・自然の多様性を理解させ、尊重させる力があるはずなのです。

☆☆☆

以上は大上段に構えた、楽観的すぎる、ノーテンキな希望かも知れません。しかし。しかし、です。社会において、馬鹿げた希望や夢を大真面目に、且つ熱く語ることを許された唯一の聖域が大学であると思うのです。そして多くの大学がある中で、お金で割り切れない、文化を語る土壌があるのが芸術大学なのです。利潤追求一辺倒、お金にならない学問は切り捨てられつつある昨今、私達はこのことを今一度しっかり考えてみる必要があるのではないでしょうか。

「芸大」で「観光デザイン」を学ぶ。繰り返しになりますが、それは、「私たちが先人から受け継いできた文化・芸術の素晴らしさを発見し、あらゆる表現手法を用いて、その重要性を世界の人や社会に伝える」作業であるのだと思います。そしてそうした作業を通して、微力ながら世界の平和のための一助となればよいと考えています。金や地位や名誉が手に入らなくても、批判を受けても、細々と、しかし力強く誇りを持って研究を続けていきたいと思う所以です。

（了）

やまむら・たかよし（当時、京都嵯峨芸術大学芸術学部観光デザイン学科専任講師）

出所：京都嵯峨芸術大学ホームページ『学びのヒント』（2003 年 10 月 27 日）
http://www.kyoto-saga.ac.jp/university/communication/hint/backnumber.php?num=4